

〈OG・OBの方々から〉

熊本城がカレッジ

緒方 惇（女専英文一回）

二〇〇七年（平成十九）は、熊本城築城四〇〇年ということで、なにかと築城や熊本城がらみのイベントが催されました。

そんななかで、ああ、私のカレッジ生活は、熊本城内だったんだなあ、と思いをあらたにしたものです。

だって、私たちの校舎は、今の天守閣のところにあったんですもの。

熊本城に関しては、熊本市文化財専門相談員で、最高の「熊本城博士」でいらつしやる富田紘一氏に、なにかにつけておききしているのですが。

その富田氏によれば、明治十年（一八七七）の西南戦争時に、天守閣も本丸とともに、城内での不審火で炎上。天守閣が再建されたのは、昭和三十五年なんです。

その間の、天守閣跡地に建てられていたのが、戦時中の第六師団司令部。そこが、終戦後の昭和二十二年（一九四七）に、熊本県立女子専門学校の学生になっていた私たち

の学び舎。つまり「熊本に初の女性のカレッジを」と創立されたところであったわけです。

元師団司令部の建物は木造だったのですが、窓は全部白枠の、なかなか瀟洒なものでした。内部は、シャンデリアのあるフロアや、大小さまざまな部屋がありました。

開学早々の県立女専は、英文科、生活科、被服科の三科で、各科の学生数は四十人ぐらいだったのではないでしょうか。私は英文科でしたが、その英文科が、入学以来、クラスの人気がどんどん減少。一番の原因は英語の授業がやたらにハードだったためです。

昭和二十五年の春に卒業しましたが、私たちの一級下までが女専で、そのあとは女子大になります。

女子大になってから、大江のキャンパスに移転したのですが、先の富田氏によれば、城内カレッジは昭和二十八年には博物館になったそうです。私は卒業と同時に、昭和二十年の終戦までいた東京にもどりましたので、それらのことはまったく知りませんでした。

さて、その城内カレッジでは、毎秋、大イチョウの見事な黄葉を満喫。体育の時間はといえば、なんと、いまの天守閣前の広場が運動場になり、バドミントンのコートにもなりました。晴れた日のランチタイムは、「午砲台」とよんでいた高台の石垣に並んで腰掛け、空襲での焼け跡ものこる熊本市街や、遠くの山々を見渡しながら、でした。

私は北千反畑町の下宿から、不開門あかすのちんの坂をのぼって登校。大学教授から日本有数の歴史学者になった大江志乃夫氏（県文化協会専務理事・大江捷也氏のお兄さん）など旧制五高生たちが、女専の学生会へ連絡などでやってくるのも、この門を通つての坂からでした。

そのころ、長塀前のお堀添い、白い柵囲いの芝生の庭に、白いテーブルと椅子を幾つか出した、牧歌的な音楽・画廊喫茶「セルパン」がありました。

ある午後、英会話の授業をエスケープして、行幸坂をセルパンに向かっていますと、英会話の老女史先生にばったり。精いっぱい英語で、午後のご挨拶をして、シメシメといそぎ足で……。とはいかず間もなく気づいた先生に、大声でよびもどされた一幕もありましたっけ。

でも、なによりなにより、この熊本城カレッジのすばらしい思い出は、先生達の城内逍遙講義でした。

先の英会話の先生は、城内の四季折々の花木をめぐりながら。

そして、入学時から卒業の年まで、私たちの英文科に、五高から出講してらして教えて下さった、「英詩」の河原畑正行教授。もともと背がお高いのに、さらに城内の高い樹々の間のそらを仰ぎながらの、美しく韻をふんだソフトな英語での朗誦！

いまも私が、英米詩人たちの詩を忘れないのは、先生の

あのなめらかなアクセント付きでの英詩を記憶しているせいでしょう。

そして、松本雅明教授。やはり同じ年月、五高から。英文科の私たちに、比較文化史の講義にきていただきました。城内の古木や大楠が教材で、当時、ひじょうに斬新な学説だったと思うのですが、アルカイック・スマイル的な語りで私たちを魅了。その論調の影響をうけて、英文科から西洋史へと進んだ級友もいます。

とにかく私たちは、日本のアプレゲールの第一波だったと思います。

教授たちの講義のはしはしからも、耳目に接する内外の芸術や文学の情報からも、戦後を貪欲に吸収しました。それは、戦時中の飢餓感が強かったからです。そのハングリ―精神は、物質面より学究面に、つよくながくのこったようです。充分に高齢になった現在も、まだみな現役。研究や執筆に追われています。

そしてそんな私たちの背を、かつての熊本城カレッジが、照らし続けてくれている、と思われてなりません。

（詩人・熊本県文化協会副会長）

世の中の嘘

このかわうその皮ほんとのかわうその皮

山田 とし (国文三回)

私たちが若い頃は、「結婚は女の幸せ」と異口同音に言われて、そうかと思つて、少しも疑わず結婚したものである。しかし現実はどうであつたらう。

男は、結婚すれば明日から妻に食事を作ってもらい、子が出来れば妻に養わせ、親が寝たきりになれば妻に介護をさせ、己が老いれば妻に世話をしてもらう。どうみても「結婚は男の幸せ」である。女の結婚は一生一日も休むことのない奉仕と労働の場であつて、この現実を最初から理解していたら、娘たちは誰だつて躊躇しただらう。だからこそ、あんな嘘を言い続けてきたのだ。

ウソというものは、小さく言うとすぐ見破られてしまう。ウソは、現実には有り得ない、大きな作り話をすれば、人は簡単に騙されるものだ。

私はバスの中や繁華街で、よく中高年の奥さんたちの顔を観察するのだが、みな同じように似ていて、我慢と忍耐でできあがつた、一種恐ろしい表情である。

それは能面に冷酷に表現されている。美しく幸せそうな

のは皮肉にも「小面」という若い未婚の女の面のみである。結婚したらとたんに「深見」など、強いて微笑みはしていても額には細い縦皺が出来ていて、はや憂いがある。さらに進んで「般若」は、男に言わすれば嫉妬の醜い顔かも知れないが、我らが見れば、その眼には深い悲しみと嘆きがこめられていて、「鬼の泣く声」が聞こえる。男を持たなければ、決してこんな顔にはならなかつたものを…。

「二十四孝」という中国の書物は、私たちも小学校で繰り返し聞かされた。冬、老母が筍が食べたいというから息子の孟宗が竹林に捜しに行つたら筍が生えていたのだ、夏は親のほうに蚊が行かないように自分の肌を酒を塗って蚊を集めて寝たのだ、あり得ない、極端な話ばかり。しかし、それこそ「孝」を大衆教育にせんがための、ウソのつき方を古人はよく心得ていたわけだ。

誰だつて年取つた我儘な親の世話をするのは嫌だ。嫌な仕事は女にさせるのが日本流である。だが「二十四孝」を読めば、中国ではすべて男子が親の世話をするのである。尤も、中に一名だけ女がいる。これは齒無しの姑に自分の乳を飲ませて養つたというもので、女しかできないので。

「日本は世界の長寿国になった」と発表された当座は、なんと幸せな平和な世になったものだ、と嬉しかった。長寿こそ人生最高の幸せ。昔から人は切に長寿を願つてきた。わが「古今和歌集」を見ると、巻第七は「賀歌」である。

賀とは何かというに、内容はすべて長寿を願い、祝う歌ばかり。四十の賀に始まり、知人縁者を招いて宴を開き、めでたい歌を詠む。それでも長寿は得難くて、僧正遍昭などは七十の賀を時の帝から賜ったほどである。

「賀歌」の第一番におかれた読人しらずの古歌は、美しいお祝い歌として薩摩琵琶にも伝承され、明治十三年、国家「君が代」となった。(原歌の初句は、わが君は)。

年の初めの挨拶は「年賀」であり、今でも文面には「謹賀」とか「賀正」とか、「賀」の字を入れるが、あらたまの年の初めに長寿を祈った、昔の名残りである。

去年、健軍神社へ初詣に参じたら、拝殿の前、向かって左側に「さざれ石」があるのに気がついた。胸くらいの高さで不思議な乳白色の淡いつぶつぶの輝きを持つ。解説によると、この石は少しずつ大きくなるという。これなん、さざれ石。さては単なる和歌の比喻法ではなかったのか。

長寿国家のニュースを目出度い気持ちで聴いたのは、「鼓腹撃壤」のようなイメージを描いたからであろう。中国古代の理想の天子とされる堯の後継者・舜は、自分の政治が民に喜ばれているか、帝として支持されているか知らなかった。そこで粗衣をまとい、城下を歩いてみた。畑の畔に爺さんがいたので、どうかねと聞いてみた。爺さんはまさかその人が天子とは知らず、「めしは腹一杯食っているよ。一んち畑に出て働いているよ。日が暮れたら帰るよ。井戸も

あるよ。天子様のおかげなんてどこにあるかね」と腹を叩き、足踏みをしてみせた。舜は満足して帰った。

でも、我が国の長寿社会はこうはならなかった。働くことはおろか、食事も排泄もままならぬ寝たきりになり、意志の疎通もなく、幽霊のようになって長生きをしている。いま二百万人とも、やがて四百万人になるだろうとも言われる。ああ、誰がこうなりたいと望んだらうか。

戦後、社会主義的方面から言われ出した「揺り籠から墓場まで」という、密のような甘い言葉。これこそが人生の幸せと言われ、疑いもなく信じて、国やタダの薬物・医療を頼ってきた結果が、これである。

およそ世の中の嘘とはこのようなものではないか。

(古典文学講座「百日紅」主宰。九州

沖繩芸術祭文学賞・熊日文学賞・同

人誌「九州文学」賞受賞)

徒然なるままに

西本 敬子（国文十回）

月日の流れは球磨川のごとく、いつの間にか卒業四十五年も過ぎ、あの頃が懐かしく思い出されます。

迫徹朗先生が担任で、卒論でお世話になった鶴久先生、今でも関西でお会いする山本捨三先生あと村中末吉先生や本田義彦先生、古沢未知夫先生など、まだ御髪もふさふさの若き日の先生方があの女子大の構内を闊歩するお姿が臉に残っております。

ちょうどあの頃は六十年安保闘争の頃で授業をボイコットして樺美智子さんの追悼集会にみんなで出かけましたね。そうそう学生食堂のうどんが十五円でした。

そして、いよいよ卒業、玄関のソテツの群生が、ガウンに角帽の学士さま気分です卒業写真を撮っている私たちを見守っていました。社会に出たら、人様の役に立つような人になるんですよと言っているようでした。

卒業後、宮崎の高校に勤め、結婚し大阪に出て、久し振りに帰熊した時は、熊本県立劇場の一角に「旧熊本女子大学跡」の標識があるばかり・・・寂しかったですね。でもその後五十周年で帰熊し、月出の熊本県立大学を見学した

折、近代的な建物が立ち、その中に二百台並んだコンピューターを見て、時代の流れを感じ、学内を歩く学生たちがほとんど男性なのは驚きました。女子大も変わったんだなあ。

時代は変わっても、私と文学はやはり切れませんでした。近くの公民館の文学講座に参加して、講座終了後その先生にお願ひし、すぐグループとして発足、あれから三十年、今も「文学グループパトスの会」を主宰し、月に一度集い近代文学を学んでいます。紫苑会の関西支部総会の折、木村一信先生とお会いし、今では先生も講師陣の一人、お忙しい中ご協力いただいております。

思えばひとくちに三十年と申しますが、ひと月に一冊ずつ読んだとして、三百六十冊は読んだこととなります。はたして身についたかどうかは別として、「継続は力なり」で何かは残っているでしょう。

女子大で国文学を学んだことが、高校の国語教師として、また今、文学グループの主宰として、ほんとうに細々と継続するうちに、私の中で晶子が叫び、漱石が煩悶し、龍之介が葛藤し、鴉外がマントを翻し、多喜二がうめき、啄木が嘆き、由紀夫が悶え、藤村が微笑んでいます。これからもきつと文学との交わりは一生続くでしょうね。

最後になりましたが、在学中、山本先生に教わった近代文学の詩の中で、今でもつい口ずさみ、忘れられない詩が

ありますので、ご紹介いたします。

さまよひくれば秋ぐさの

一つのこりて咲きにけり

おもかげ見えてなつかしく

手折ればくるし花ちりぬ

佐藤春夫「殉情詩集より」



参考 <http://www.jitk.zaq.ne.jp/bacp300/sion/>

(私のホームページです。パトスの会も紹介しています)

(三十七年三月卒業)

わが干支四つを生きまして

佐藤 祐子（英文三十回）

長かった夏のあとにも、秋は来るもので、このほどよい気温に身を置いてみると、今年の夏のあの暑さもすっかり忘れてしまうのが人間である。熊本の友人からは、勘弁してという顔文字付きの「暑い！」というメールが、今年は実に十月上旬まで続いたのである。その頃、ここ関東では、朝から晩までかぐわしい金木犀の香りに包まれる、至福の季節を迎えていた。どうにか順調に秋が来ていたのである。そんな頃でさえ、「まだ暑い、熊本は一体どうなってるんだろう」という嘆きをご当地より聞き、さぞかし辛かるうと同情するしかなかった。それから足早に、秋は転がり込んで木々はあでやかな紅葉を見せ、もう今日は立冬である。

この頃になると、臨時的にせよ高校の教壇に立つという夢が叶った、二十九歳の秋を思い出す。その頃、私は植木町に四歳の娘とふたり暮らす、シングルマザーだった。まだ若く世馴れない私にとって、その現実は無すぎ、時には自分の置かれた立場に呆然とした。思慮深い女子大のクラスメートの誰ひとりとして、離婚という憂き目を味わった人はいなかった。そんな頃、卒業したとき望んでもなれなかった高校の教師という職に、今度はまさに生活するため

に就くことになって、どんなにうれしかったか。自分が生きていくという実感は私はそのとき初めて体に漲らせた。そこへ至る道のりがあつてよかつたときさと思う。

大学に行った甲斐があるという言う方をするなら、あのときほど卒業証書のありがたみを感じたことはなかった。目覚めては、希望に燃え、車で竹林を抜け、山道を下りては上りして、娘を保育園へ届け、職場を目指したあの晩秋の朝々の、胸膨らむような気持ち。のどかな自然に囲まれた高校の、よき時代の素朴な生徒達。そしておっとりとした会話のある職員室。農業高校だったので、生徒がつくる野菜や、パンや、温室のカーネーションなどを見ては、感心したものだ。思えばもう二十年も前になろうとしている。それから、熊本のあちこちの高校で常勤講師として勤める機会に恵まれた六年間。そんな日々、何を思ったのか、淋しさに耐えかねたのかもしれないし、このままでは終われないという気がしたのかもしれない。九歳になった娘共々迎えてくれる人と縁あつて、はるばる八王子まで嫁いで来た。その後、この地で産んだ三人の息子たちに、私はよく熊本弁で熊本の話をする。息子たちはそんな私を見て不思議そうにこう聞く。

「お母さんは熊本にいたんでしょう？どうして今ここにいるの？」そういう子らの三つの頭を連想させる、ある産物が、この夏わが家の庭で実った。カボチャである。

まるで宝物を運ぶように、果物の皮や野菜くずを土に埋

めている私の庭には、あちこちに野菜や芋の苗が自然に生えてくる。その一つ、カボチャの巨大な葉やツルが、七月になると、庭半分を埋め尽くす勢いとなり、しだれ桜にまで這い上がった。黄色い雄花や雌花をあちこちに付け、小さな実となるも育たず、地面へと落下したものは数知れない。中で、日ごと夜ごと、著しい成長を遂げた二個だけが、カボチャへと成長し木に吊り下がった。その大きさと言い、肌の色つやと言ひ、生き物だなあ、とつくづく私に、見上げさせるものだった。そのカボチャの球形を眺めるにつけ、これより多くの三つの命を私はここで産んだんだなあ、そのうち二つは、四十歳を過ぎてからだだったものなあ、と、なおさら、今年庭にできたカボチャよりも、とてつもない奇跡に思えたのである。

私が熊本からここに至る道のりと意味を、有無を言わず、私に肯定させるもの、それは今、目の前で動き回っている子どもだろう、と答えるしかないような、圧倒されるエネルギーをこどもというのは持っている。それを見つめる私は、何人育てても、不器用この上ない母親で、我ながら呆れることしばしば。今では、体がもたず、夜は、子どもより早く布団に入ってしまう。たいてい、本を読む。思えば、学生の頃はそれほど読まず、仕事をしていたときも読まず、読むようになったのは、つわりで寝たきりのようにして過ごした七、八年前の夏からではなかったか。

この夏は、「富士日記」の三巻を、山小屋にこもったよう

な気持ちで読んだ。初め、何で人の家計簿や献立を読まなくてはならないんだろう、と思ったが、昭和四十年代、山梨の空気に惚れて別荘を建て、足繁くそこを訪れる作者と、会う人会う人との会話、またその内容をもれなく描く、書き手の記憶力と表現力が、生き馬の目と度肝を抜いていて、しみじみ山での暮らしを読み味わった。続いて、その著者、武田百合子の全作品集にも目を通した。その一連の作品を読み、世の人々が実のところ何を読みたいのかがわかってきた。書く人が、誰とどんなことを喋り、どう感じ、何を食べ、どんなことをしてその日を過ごしたのか、作り事でない生の一日一日の連続に、人は興味をそえられるのだ。

私たち三十回生が熊本女子大に、在学したのは、昭和五十年代であり、大江キャンパスと月出キャンパスに、四年間の半分ずつを過ごすという幸運に恵まれた。地面が土で緑に囲まれ、教室も学食も床がみしみしときしんだ、大江時代がはるかに懐かしい。殊に昼の学食の、熱いうどんつゆの匂い。今思えば、あれは鰹ばかりでなく、鯖ぶしも混じっただしの匂いだった。元気な日も、落ち込んだ日も買って食べた、お気に入りのピザパンの、チーズとハムとピーマンの絶妙な味。あれはどこのパン屋さんのだったんだろう、確かな手作りだった。それをいつも、こぼれんばかりの笑顔で手渡してくれた、紺のスモックの、優しい売店のおばちゃん、お元気だろうか。懐かしくて、ああ涙が出る。

言霊の幸う国

西口裕美子（国文三十一回）

TVのクイズ番組がこれ程多いのは、安上がりだからだろうか。若い芸人、売り出したばかりのアイドル。忘れかけられたタレント。次々と珍解答が出され、笑いの種になる。だが、暢気のんきに笑ってはおられない。

「ドンダケー」が流行る世の中。話の落ちに「ドンダケー」を付けて、次々に移ってゆく話題。相手の言葉をいとも簡単に「ドンダケー」で片付ける。これは会話だろうか。対話でないことは確かだ。

顔の見えない、恐ろしい会話が一日中交わされている。チャット。相手を傷付け、打ちのめす書き込み。人格を持たないコトバたちは、機械の中を往き来しながらみるみる暴走してゆくのだ。

日本語は、どんどん痩せてゆく。言葉が細ってゆく。言葉の貧しさは、そのまま社会の貧しさを意味するだろう。こんなに言葉に鈍感になった社会で育つ子どもたちは、どうなってゆくだろう。

『俳句甲子園』をご存知だろうか。八月・九月（ハイイクの日）に愛媛県松山市で催される、全国規模の大会だ。五

人一組になった高校生が、自ら作った句で相手チームと対戦する。作句力と鑑賞力（ディベート）を総合して優劣を競い合う。今年十回目を迎えたこの大会に、七年連続で出場している。そこに行くと、言葉に対する熱い思いと豊かな感性を持った高校生たちがこんなにいたのか、と驚かされる。俳句に真正面から取り組む彼らの姿は感動的だ。

「十七音」のために、彼らは全エネルギーを費やして言葉を探し、選び、紡ぎ出す。その決勝リーグに進むのは四校で、その中の三校は予選リーグから勝ち上がる。残りの一校の座をかけて、三十三校が敗者復活戦に挑む。題が発表されると、一時間以内にチームで一句、俳句を提出しなければならぬ。暑さと緊張感のために、高校生たちは既にぼろぼろだ。そんな状況の中で発表された今年の兼題は『かひ徽——』。

こんなに難しい題が出ても、彼らには嘆いている暇がない。文芸である俳句。だからこそ、徽であっても、美しく詠むべきだ。生徒に、徽を美しく詠もう、と声を掛けた。五感を使って、具体的なことを想い画く。徽はどこに生えている？との質問に、彼女たちは答えた。「一番やわらかい所だ」と。それは何処？何？と私。彼女たちの感性はやっぱりすばらしかった。その答えとして、「それは、やさしい言葉」とつぶやいた。

そこでできた句が

言霊の国にうつすら薔の花

だった。美しく詠めていると思う。言霊の幸う国、日本。言葉に魂があるという感性こそが、今の社会に欠落したものだろう。言霊の国にうつすらと生えていると詠んだところには、まだ希望が見える。そして、彼女たちは私の願いのように美しく薔の花と一句を括った。うつすらと生えた薔の花は、払えば消える。しかし、油断すれば広がりもする。

再会／再開

土屋 陽子（英文三十八回）

大学を卒業してもうすぐ二十年。大学のすぐ近くに家を構え暮らしていますが、卒業して以来大学との接点はなくなり、足も気持ちもすっかり遠のいておりました。

それが、今年、ふとしたきっかけで再び学び舎の門をくぐり、知人、旧友、そして恩師と再会する機会を得ました。

私は、熊本県立熊本女子大学時代、文学部英文科で英語学を四年間学びました。当時は今のように広い敷地ではありませんでしたし、学食や図書館の場所も今とは違いました。ただ、白亜の校舎の美しさは今も変わりありません。

就職先は学んだ英語を活かせるものではありませんでしたし、結婚してからはなおのこと英語から遠のいた生活でしたが、子供ができて大きくなるにつれ、英語に触れる機会がつかれないかしら・・・という気持ちは常に頭の中にありました。

そして昨年の夏、息子が小学校三年生になり英語を学び始めたことをきっかけに、予てから頭の奥の奥にあった「ホームステイボランティア」をやってみようと一大決心をしました。その当時、下の娘は幼稚園に入園したばかり。

一抹の不安を抱えながら、家族と相談し、やはり今、子供たちに異文化とネイティブの英語に触れるチャンスを与えたいと、熊本市の国際交流会館にボランティア登録をしました。

登録をして、一カ月後の九月初旬に国際交流会館から初めての依頼の電話がありました。熊本大学に一年間留学する、初来日のアメリカの女子学生を受け入れて欲しいというものでした。一週間という短期の滞在、アメリカの大学で日本語を学んだので基本的な日本語は出来るという、初めて受け入れる相手としてはベストな条件でしたが、それでも不安は残りました。

やって来た彼女は、家の中の会話では日本語しか使おうとしないのですが、それが意外に通じないのです。会話ができ立たない時の沈黙程いたたまれないものではありません。そこでそれこそ女子大時代に使っていた和英辞書と英和辞書を常に手元において、辞書をひきながらの一週間でした。

そして、この春二度目の依頼がきました。その内容というのは我が家がボランティア登録をした際に出した条件と全く合わないもので、なぜ我が家に依頼がくることになったのか不思議なのですが、「県立大学の留学生」ということに私の触手が反応しました。家族会議の末受け入れを決め、大学で開かれた説明会に下の子を連れて出席しました。

久しぶりに白く輝く大学に足を踏み入れ、会議室に入る

と他のホストファミリーはほとんどが県立大学の学生でした。かなり場違いな感じのする中に混じって説明を聞きながら、同世代のいない我が家で果たして留学生の彼に満足してもらえらるだろうかと大きな不安を抱きました。しかしそれより会議の席で感じたのは、ホストにチャレンジするのが英語学科の学生だけではなくそれ以外の学科の学生が多いということへの驚きでした。そして何より私が驚いたのは、私が在学していた頃にはなかった交換留学のシステムが存在するということでした。ホストの中の二人の学生は一年間モンタナ大学で勉強してきた学生でしたし、これから一年間留学を予定している学生もいました。留学するのは英語学科の学生に限っていないということも、私にとつては驚きでした。県立大学に生まれ変わり単に女子大から男女共学に変わっただけでなく、学部学科も、大学のシステム自体も大きく様変わりしていることを感じました。

ホームステイがスタートして、毎朝娘の幼稚園を回って大学まで彼を送るのですが、大学へ通うのは学生だった昔を思い出させてくれてちよつとわくわくしました。でも、彼が他の学生たちから孤立しないようにと、大学に着き彼を見送った後は、他のホストの学生に声をかけ、毎日のように情報を求めました。すると意外や意外。淡々としてみえる彼女達でしたが、留学生達をもてなす為に、映画、ゴルフの打ちっぱなし、家族パーティー、居酒屋、カラオケ

パーティーなど様々な趣向を考えていたのです。ホストとする学生同士もお互いは友達でもなく、学科も様々で、お互いは知らない者同士なのですが、その若者達が一緒にモンタナからの留学生をもてなそうと積極的に動いていました。私のように学生でない者も気軽に受け入れてくれました。お蔭で我が家にステイした彼も一人孤立せずに同年代の若者達との日本の楽しみを経験することができたのです。

今回のこの県立大のホスト体験を通して、私は母校の変化と現在の学生たちのエネルギーを垣間見ることができました。歩いて十分の距離に暮らしているながら、これまでは気づくことがなかったことです。とても刺激的な経験でした。ホストをした学生やその家族と知り合えただけでなく、恩師や旧友とも再会でき、このように文章を書く機会も与えてもらいました。

現在の県立大学の学生はたくさんのチャンスに恵まれています。羨ましいくらいそのチャンスの数々をどんどん活かしていつて欲しいと思ったのと同時に、私自身、これからはさまざまな機会を通して、大学とのつながりを持ち続けていきたいと思いました。

(平成二年卒業)

女子大・県大での思い出

甲斐 朋子（国文四十二回、日大院修了）

私が入学した頃は、まだこの大学が「女子大」と呼ばれていた頃でした。気がつけば、女子大、県大の大学院、外国語教育センターと足掛け十年もの間、私はこの大学でお世話になっていました。卒業してだいぶ経っているのですが、大学は遠い存在ではなく、いつでも戻ることのできる古里のような気がします。

いま、この十年という月日をあらためて思い返してみると、学部生、院生、社会人とそれぞれの時代で得たことが今の私の根底にあることを感じます。

学部生時代の思い出といえば、技術の上達はさておき、その時間の多くをマンドリンクラブのために使っていたように思います。先輩方のマンドリンへかける情熱とマンドリンを弾く華麗な姿は眩しいものでした。上達するために、時間をかけ、黙々と練習を積み重ねていくことが基本であり、近道、逃げ道はないということをこのクラブの活動を通して悟りました。それから、女性だけでも力を合わせれば重い楽器や荷物をテキパキと運ぶこともできる。つまり、女性、または、一人ではできないからといって、最

初から誰か他の人を当てにするのではなく、それをいかにして行うのかを考え、実行しなければならぬということを得得しました。これは女子大ならではの貴重な体験だったと思っています。

また、大学院生時代から始まった数々の共同研究、これも忘れられない思い出です。共同研究の醍醐味は、なんと言っても原稿が出来上がったときや、発表が終わったときに、その喜びを分かち合える人達がいることです。個人研究とは違い、作業を進めるときも確認し合い、納得した上で進めていくのは時間や手間がかかるという見方もあります。しかし、自分ひとりで研究を進めていても壁にぶつかったり、作業の方向に疑問を持ったりします。そんなとき、一緒に進めていく仲間がいると、そのような壁も皆で乗り越え、最後までやり遂げることが出来ます。私一人だったら、途中で投げ出していたと思うことが何度もありました。ここ一番の辛いときを共に励まし合う仲間がいることの心強さと、それを乗り切った後の喜びは今でも忘れることができません。

さらに、社会人として外国語教育センターで働いてみると、学生時代には見えなかった大学の別の面を見ることができました。学生の頃は「大学が入学式を行う」等、「大学」という顔の見えない何かが学校を動かしているという印象を抱いていました。実際にその中で働いてみて、大学が漠

然とした何かではなく、そこで働く職員一人ひとりが大学を動かす歯車となっていることがわかりました。そして、この歯車の働きは表に出ないものが多く、表に出るときには問題がある場合だということも身にしみて感じました。

また、物事を順調に進めていくためには、表に立って進めていく人がいるのと同時に、見えないところでそれをサポートしている人がいるということにも目が行くようになりました。外国語教育センターの業務の中で、教室のコンピューターの立ち上げと終了の際に、故障がないかの点検をするというのがあります。「外国語センターにはコンピューターがあつて、いつでも使える」、これが学生時代の私の目に映った外国語センターの様子なのですが、これには陰の努力がありました。どんなに性能のよい機械でも、点検と修理なしには、調子よく使い続けられないものなのです。異常を初期の段階で見つけ出せるのは、毎朝の点検の成果といえるでしょう。異常が見つかったら、すぐに専門の業者に修理を依頼するのですが、授業の合間を縫つての作業は、授業に影響が出るのではないかと心配したことを覚えていません。

このようにして毎日の生活の場を見るようになってから、自分の知らないところで誰かが働いてくれていることに対して感謝の気持ちが生まれてきました。建物内の掃除でも、お金を払っているからきれいにするのが当たり前という考

えもあります。お掃除をされている方も、この建物を利用する人が少しでも気持ちよく過ごせるようにと思つて掃除をされていると思います。そのお気持ちに対して、ありがたいなあと思わずにはいられません。

振り返ってみると、ここには書ききれなかったことも含め、実にいろいろな体験をさせていただいたものだと思います。母校県立大学、そして、そこでの活動を陰で支えてくださった先生方、職員の方々に対して、本当にありがとうございましたという気持ちでいっぱいです。

これからも熊本県立大学が、多くの人々に様々な体験や視点を提供し続ける素敵な場所であつてほしいと思つています。

(外国語教育センター嘱託退職)

目にはさやかに見えねども…

吉村 仁里（日文四十六回）

猛暑。酷暑。そんな言葉を目や耳にしない日がない夏だった。「うだるような」という表現がピタツとはまる。そんな八月のさなか、これまた暑いとわかりきっている京都へ旅に出た。我ながら酔狂である。

夜行バスに揺られた一晚。そういえば、十年ほど前にも同じようにバスで京都へ向かったことがある。その時心に誓った。「夜行バスには二度と乗るまい…」と。それをすっかり忘れていた。一日の三分の一もの時間、狭い座席に身を縮め、首や膝をおかしな方向へ曲げたままの姿勢で過ごすというのは、想像以上の苦行だ。最近は何ブートキャンプで鍛えており、体力には十年前より自信があるとはいえ、やはり苦しかった。何故バスを選んだかと、自分の迂闊さを恨んだ。が、後の祭りである。

浅い睡眠と覚醒とを繰り返しながら、バスはなんとか無事に私達を京都駅へと運んでくれた。今回は、京都に行くのは初めてだという友人と一緒だ。勇んで案内役を買って出た以上、有意義な旅にしなければならぬ。

京都駅で軽い朝食をとり、真っ先に向かったのは太秦の

広隆寺。ここは、京都を訪れる度に必ず足を向ける場所だ。国宝第一号に指定されている弥勒菩薩に会いに行くのである。初めてここを訪れた時、見事にこの弥勒菩薩の魅力に取りつかれた。じっくりと何かを考えているように伏せた目元、小さく微笑みを浮かべた口元、そつと頬に添えた華奢な指、…いたるところにその優しさと美しさが表現されている。ドイツの哲学者ヤスパースが「人類が作り上げた最高の美」と絶賛したのも頷ける。仏教の教えによると、弥勒菩薩とは、釈迦入滅後約五十六億七千万年後（！）に降りてきて、人類を救ってくれる菩薩だという。あの半跏思惟の姿は、気の遠くなるような長い間、どうしたら人々を救うことが出来るのか、じつと座って考え込んでおられる姿なのである。そんなことを思いながらじつと対座していると、えもいわれぬ気持ちになる。兼好法師の言う「あやうこそものぐるほしけれ」とは、こんな心地だろうか。その昔、京都の学生が、何かに取り憑かれたようにふらふらと弥勒菩薩へ近づき、指を折ってしまったという話を聞いたことがあるが、彼の気持ちが何となくわかる、気がする。

弥勒菩薩の微笑みに癒され、「ものぐるほし」くなった心を落ち着けた後は、メジャーどころを巡る。金閣寺、南禅寺、清水寺……。さすがは日本を代表する観光地。外国人の多さと迫力に圧倒されながら、どうにか一日目を終えた。

思えば、初めて京都を訪れたのは、大学四年の頃。卒業を前に、友人たちと旅行を計画した。まだ旅慣れしていなかった私達は、ついつい欲張ってしまい、超多忙な旅となった。過密スケジュールで大変だった分、思い出もたくさんある。中でも印象深いのが、恩師である梅林先生の学生時代の下宿先を訪れたことだ。今思うと、さぞかし迷惑だったことだろうと汗顔の至りであるが、その方は突然押し掛けた私達を歓迎して下さった。京都の人は余所者には冷たい：と言われることがあるが、それは偏見だ。私が京都で出会った方々は、皆さん心優しく、親切な方ばかりだった。こんなふうには、見知らぬ人と言葉交わすこと、そして人の温かさに触れることも、旅の醍醐味のひとつだと思う。

その時旅路を共にした友人達は、学生時代、いろんな出来事や感情を共有した大切な仲間だ。志を同じくする者同士が出会い、互いに刺激し合いながら成長していく：大学とはそういう場なのだと、今改めて思う。私達が入学したのは、女子大から県立大に変わった節目の年。変わりゆく時の中で、変わらない大切なものをたくさん学んだ。創立六十周年を迎えた大学の歴史からすると、まだまだ若輩者ではあるが、その一員であることを誇りに思う。その友人達とは、就職や結婚、子育てなどでそれぞれの道を歩むようになり、以前ほど頻繁には会えていない。しかし、大学の四年間、それから後の付き合いを通して得た財産は、消

えることはない。今でも会えば十年前の瑞々しさを取り戻し、話に花を咲かせられる自信がある。いや、それぞれに積み重ねた歳月の分、さらに輝きを増しているのではないだろうか。

今、私は中学・高校で教鞭を執っている。中高一貫の女子校で、少女達のパワーに圧倒されながらも、充実した日々を送っている。彼女達は、これからどんな風に成長し、どんな大人になっていくのだろうか。どんな出会いを経験し、どんな未来へ羽ばたいていくのだろうか。

かつての少女は、現役少女達の姿に自分を重ねながら、ひとり感慨にふける。ふと見上げると、空がずいぶん高い。「目にはさやかに見えねども：」。センチメンタルな気分なのは、深まり行く秋の気配のせいだろうか。

(平成十年卒業)

何とかする力

田川 恭識（日文四十八回、日文院修了）

「皆さんおはようございます。今日はちよつと寒いですね。風邪をひいていませんか？体につけましようね。それでは授業を始めます。」ある大学の教室、異国から来た留学生を前に、今日も日本語教師としての私の一日が始まります。

現在、熊本県立大学の日本語教育研究室では、韓国、中国を始め、タイ、アメリカ、熊本市内の小学校と、日本語教師養成課程を持つ他の大学にも類を見ないほど、教育実習の場が用意されているそうです。しかし私が学部生だった頃、海外での教育実習の場は、韓国の祥明大学校だけに限られていました。そして、私が教育実習の授業を履修したその年、始めて中国の南寧大学へ実習生を送ることが出来るようになりました。その年、教育実習の授業を履修した学生は、私も含め、確か十名くらいだったと思います。韓国に行くか、中国に行くか。究極の選択の結果、私も一人が中国へ行くことになりました。そこから先は本当に大変でした。先方の大学との連絡も思うようにつかず、渡航の手続きも上手くいきません。「無事に目的地につける

のだろうか：、」「首尾よく授業ができるのだろうか：」様々な不安で胸が一杯でした。現地についても紆余曲折があり、本当に大変な教育実習でした。今思い返しても、よくやり遂げたなと思います。同じような状況で「もう一度行け」と言われればきつと断るでしょう。それくらい大変でした。しかし、今思えば、私が日本語教師に本気でなりたいと思うようになったきっかけは、すべてこの中国での教育実習にあります。

私が熊本県立大学日本語教育研究室に在籍していたころ、指導教官である馬場先生に教えて頂いたことは、枚挙に暇がありません。ですが、その中で一番心に残っているのは、「日本語教師はたとえどんなに大変な状況や環境にあっても、その状況や環境を乗り越える力が大事だ」という精神です。もし、赴任先に日本語の教科書が無ければ、自分で教科書を作る。もつと遡って、もし教室が無ければ、自分で教室を作る。学生の机や椅子が無ければ、自分で作るか、どうにかして調達する。日本語教師たるもの、たとえ何にも無い状況でも、日本語の授業が出来なくてはならない。そのような能力を一言で表すと、「何とかする力」という表現になると思います。「何とかする力」。その一端を垣間見たのが、先の教育実習でした。

日本語を教えるためには、日本語の文法構造を始め、音韻や音声学などの言語学的知識、さらには日本の伝統文化、

現代日本の社会構造といった極めて多様な知識が必要になります。ですが、それらの多くは、文献やテキストで学ぶことが出来ます。しかし「何とかする力」は、机上の学問では身につけることが出来ません。

熊本県立大学日本語教育研究室を経て、国内外で教壇に立っている先輩方、同級生、後輩達。それぞれ年代は違い、互いに直接の接点は無くても、皆「何とかする力」を叩き込まれ、巣立っていった仲間です。日本語教師は本当に忙しく、年中駆け回っています。ですが、「何とかする力」を叩き込まれた私は、目の前の大変な現実には悪戦苦闘しながらも「何とか」乗り越えて来ました。日本語教師にとってかけがえのない力を与えて下さった馬場先生、そして共に切磋琢磨した日本語教育研究室の皆様、心から感謝致します。

(大阪大学大学院文化表現論専攻博士後期課程在籍)

大学の思い出と近況

岩崎希裕美（日文四十九回）

先日、水道町の交差点で信号待ちをしていたところ、自転車にのった男性に声をかけられた。七十代前半に見えるその男性は、冬日と言われたその日にあつて、やたらと薄着であった。

（また面倒なことになるのかなあ）

と思いつつその人の話を聞いた。その人は遠の昔になくなってしまったお店の場所を訊ね、移転したのであればそれは何処かということも重ねて訊ねた。

「分からない」

と答えると、納得したようにならずに今度は世の中の栄枯盛衰を嘆きはじめた。信号が青になったので歩き始めると、その人は私の背中に向かって言った。

「長い人生、どう変わるかわからんからな」

大学一年や二年のころは『梁塵秘抄』や中世の武士の信仰に興味があり、そのあたりで卒業論文を書こうと決めていた。何をやるにも時間がかかる不器用な人間なので、早くから絞って準備をしていた方がいいだろうと思ったのである。だが、三年になって森鷗外について調べたことで鷗

外が非常に好きになり、やっぱり鷗外で卒論を書こうと思いを直した。『うた日記』を読んでいたとき、鷗外が詩経の一部を引用していることに気がついた。その箇所は運よく気づいたが、あとは全て気づかず読み過ごしていたというわけだ。知識がないために根底に流れていることに気づかないというのはやはり辛いことのように思えた。四階で本を読んでいると、かつての日本人が受容してきた知識の集積、ここから始めないと、という気持ちになった。最終的に、中国の禅仏教に関することで卒論を書いた。

私にとって大学生の頃というのは、膨張する内面と世の中への不適応に苦しんだ時期だったと思う。ちよつとしたひと言やちよつとした出来事を過剰に気にしていた。その中で禅の文献は、私をぎりぎりまで追いつめながら遠い雲間から落ちる光のようなものを見せてくれていたような気がする。

大学を卒業してからは、暮せればいいというぐらいで仕事を選んで、時間をつくって勉強したり絵を描いたりという生活を続けていた。納得のいく過ごし方をしてきたと思っていたが、三十歳になってはたと不安になった。水道町の交差点、私は浮かない顔で立っていたのだろうか。降りそそぐ粉塵、その中で、石ころなのか光の粒なのか分からない言葉を拾って楽しめるようになったのが、これまでの成果であるような気がする。

（二〇〇一年卒業）

文学部の思い出

松野かな子（英文五十一回、英文院修了）

私が熊本県立大学文学部英語英米文学科で学び始めたとき、世間では不況の波が押し寄せてきており、それに伴って人々の文学離れも進んでいました。学部卒業後の進路を決める頃には大学で学んだことを活かせるような職種を探すのが困難になっており、そういう状況下で大学院を出ても文学に関する職に就くのは難しく思われ、大学院進学を希望する者はほとんどいませんでした。また、就職希望の学生は皆、少しでも条件の良い会社や自分の希望により近い職種への就職活動に励んでいたように思います。

私はというと、一年次から教職の単位を取得しており、学部を卒業したら教員になろうと心に決めていたのですが、三年次に受講した米文学セミナーをきっかけに、文学の世界に引き込まれていきました。先生方は初めて文学作品に触れる学生が多いことを考慮してくださり、短編小説をいくつか、それも米文学の魅力がぎゅっと凝縮されている珠玉の名作と呼ばれている作品から、現代作家の前衛的な作品まで幅広く揃えてくださっていました。作家の数だけ作品に個性があり、自分の好みの作家に出会う度に心が色づ

いていくように感じられました。

次第にもっと深く文学を学びたいという気持ちが芽生え、また、「どのみち英語を教えるにしても、もっと勉強を積まないといけない」と思い、大学院進学を決意しました。

大学院では毎週課されるレポートや発表、課題をこなしていくうちに、英語力が向上していったように感じますし、さまざまな作品を読んで作家の意図を汲み取るうと試みた結果、他者への理解が深まり、精神的にも成長することができたように思います。

また、学部時代の同級生たちが就職難に苦しんでいるのを傍で見えていたので、修了後の自分の進路はどうなるのだろう、と不安に感じたこともありましたが、文学を学べば学ぶほど、人間らしく生きていくためには文学が必要不可欠なものであるという確信が強まり、文学の面白さ、素晴らしさを後世に伝えていきたいらいいと思うようになりました。私の面倒をみてくださった小園敏幸先生を始め、英語英米文学科の先生方も常々そう仰っていて、学生の将来のことを考え、学会で研究発表を聴講させてくださったり、実際に発表の機会を与えてくださったったり、EJLAに論文を掲載させてくださったりと、学生が研究者を志すのに充ちた土台を作ってくださいましたと感謝しています。

修士課程修了とともに、私は熊本電波工業高等学校で研究職と教職とを兼ね備えた仕事に就くことができました。

た。まだ文学を教えるまでには至らず、研究者としての一歩を踏み出したところですが、熊本県立大学の文学部で学んだことを誇りに、これからも精進していこうと思っております。

イグニション・キー

伊東 裕起（英文五十三回）

熊本県立大学創立六十周年、おめでとうございます。人間で言うならば還暦、（と、他の誰かも書いていらつしやるかとは思いますが）長い月日です。その中のわずか四年間という月日も、私にとつてはとても大きなものでした。

私が県立大で過ごした四年間は、私の人生に決定的な方向付けをしてくれたように思います。私がもし、県立大の英文科に入学しなかったら、英文学の研究者になろうとは思わなかったでしょう。その思いは絶えず燃え続け、いまだ努力を重ねている最中なのですから。

黙ったままのお客様になることを許さない授業、あえて生徒に疑問点を持たせ、「先生、いつもーん！」と言わせることで、生徒に考えさせる授業。県立大での授業は、毎回が小さな戦いでした。そしてそれは、英文学という奥深い学問の道への入り口だったのです。その楽しみを、授業の中や休み時間の議論、または八時間連続トーク（休憩なし）などで語り合った日々は忘れません。

多くの先生方に刺激や影響を受けたので、一部の先生だけのお名前を挙げるのは気が引けるのですが、アイルラン

ドについて教えてくださった小辻先生と私の卒業論文を見てくださった樋口先生には大きな影響を受けました。それが、研究室を変えた先での修士論文、そして現在の博士課程での研究に直接つながっています。

また、ELLA総会の実行委員の活動、そして雑誌『ELLA』の編集委員としての活動も、私にとつてとても貴重な経験でした。総会の実行委員としては、特に私が四次に企画・実行させていただきましたアイルランド伝統音楽のバンド「アイルリッシュ・クリーム」のコンサートおよび講演会が強く心に残っています。雑誌『ELLA』の方には短歌を載せていただきました。今読み返すと、学部時代の自分の心の様子が反映されていて、自分では恥ずかしいのですが。

学外の活動として、私は主に日本語で現代俳句の創作活動を行っており、頻繁に東京・鎌倉・山梨・伊豆諸島などで吟行を行ったり、私家版で句集を出版したりしていました。そこで、樋口先生に熊本大学のギルバート先生を紹介していただき、そこで日本語だけでなく、英語俳句の研究を始めました。そうして三年次には第八回「草枕」国際俳句大会外国語部門（英語）俳句特選を受賞するまでに至りました。この受賞に関しては、学長表彰や紫苑会からの奨学金などの、さらなる名誉と励ましをいただきました。本当にありがとうございます。そして、卒業式では卒業生総

代として答辞を読ませていただけるといふ、一生に一度の晴れの舞台にまで立たせていただいて、本当に身に余る光栄でした。

修士課程からは、博士課程の有無（当時）とギルバート先生との関係などから、熊本大学の研究室に移ることになりましたが、県立大で学び培ったものを生かして、研究に励んでおります。

修士二年の時には大学から奨学金を得てアイルランド共和国・北アイルランドに研究旅行することができました。アイルランド国立図書館所蔵のイエイツ直筆初期原稿の調査をメインに、イエイツを語る上では欠かせないスライゴー、バリリー塔、アラン島、中央郵便局にキルメイナム刑務所などから、北アイルランド・ベルファストのフォールズ街やシャンキル街、デリー（ロンドンデリー）のbogサイドなどを一人で旅してきました。どの場所も素晴らしかったのですが、個人的に一番衝撃を受けたのは、IRAの壁画だらけのbogサイド「解放区」で子供たちと犬たちに囲まれたことでした。「お兄さん、昨日のサッカー見た？」全くの無垢なまなざしと、犬たちと、そしてそれを取り囲む殺伐とした街並みに、私は価値観が揺らぐのを感じました。私はただ子供たちに、「いや、僕はただの旅行者なんで、外国から来たので」と言うばかり。そしたら、子供たちは一斉に「チャオ！」という挨拶をしてくれました。それがお

そらく、彼らの知る唯一の外国の挨拶なのでしょう。素晴らしくあたたかい一時でした。（一方、ベルファストのパブでは完全に無視されるという経験をしました。）

そんな経験をしながらも修士論文を仕上げ、今私は博士課程でイエイツの研究を続けています。また同時に俳句の研究も続けています。ギルバート先生の科研費研究「研究課題番号18520439」の研究協力者として日本の現代俳句の研究を行ったり、日本の戦争中の俳句弾圧事件についてアメリカで薄っぺらい本を出版したり、セルビア生れでスロベニア在住の俳人・映画監督のデイミター氏の通訳？をさせていただいたりしています。そんなこんなで、世界の広さと自分の小ささを感じる日々ですが、その自分を支え、奮い立たせている研究への情熱は、確かに県立大で過ごしたあの四年間に灯されたものなのです。そして、まだ先へ、先へと。

（平成十七年卒業、現在熊本大学大学院博士課程在籍）

過去は足りているか

—私の熊本県立大学—

有働 牧子（英文五十三回、英文院修了）

私の研究する作家ウィリアム・フォークナーは、彼自身「われわれの世代の父」と位置付ける作家シャーウッド・アンダスンから、その後の彼の作家人生を決定付ける或るアドバイスを受けている。そのアドバイスとは、「人は、自分を出発させる場所を持たなければならないし、その場所を持つてようやく、人は学び始める。（略）自分を出発させる場所はいかなる場所にも増して重要なのだ。君は田舎出身の若者であり、君が知っているのは、君が生まれ育ったミシシッピのちっぽけな土地のことではない」というものだ。この言葉通り、フォークナーは、自分の生まれ育った土地に留まり、ただひたすら同じ場所を見つめ抜くことで、創作という「探検」を出発させ、全うした。レヴィーストロースは書いている。「探検するということは、広く歩き回つてものを見ることであるよりは、むしろ一つの地点を発掘することである」（64）。

それによって何を見つげようとしているのか、探検する者自身分らないまま、探検は続く。私たちは、人間であ

るがゆえに、探検せずにはおれない。詩人レオン・ブローが「人はその哀れな心の中に／未だ存在しない場所をもつ／苦悩がそこにはいり込み／心をあらしめる」という言葉を残しているが、本来ならば気に病む必要などないはずの「未だ存在しない場所」を巡って苦悩してしまうこと、換言すれば、求める対象が何であるかも分からないのに探検せずにはおれないこと、このことが、人間の条件（「心」）であり、宿命である。

精神的に言うならば、心の中の「未だ存在しない場所」とは、無意識のことであろう。フロイトは、意識は言語表象と結びついており、それに反して無意識は事物表象のみ（非言語的）だと述べているが、ラカンに至っては言葉を次のように解釈する。「ことばは現実を再生産する。^{ランガイジュ}ことばなしには思考もないわけだから、世界や他者および自己についての認識は言語によって限定されている。（略）人間は、記号表現の秩序の中に登場するのであり、それに従属したものである。（略）「人間が」^{ランガイジュ}ことばの中に生まれ、そして象徴を使用するということは、体験とそれにとつて代わる記号との間に分離をもたらすことである」（ルメール79）。逆に言えば、いまこの言語によって限定された世界に足を踏み入れる前に、私たちは「去勢」される。言葉にならないものは無意識に押し込められ、その存在を抹消されるのだ。「未だ存在しない場所」とは、じつのとこ

ろ、未だ存在しないと形容するほかないほど徹底的に喪われた過去だったのである。ところが、対象がそのような容赦ない喪失の憂き目に遭ったにもかかわらず、それに対する欲望だけは私たちの中に根強く残る。ほかならぬこの引きずった欲望ゆえに、私たちは苦悩し、探検する。このような、得体の知れない欲望に突き動かされた、いつ終わるとも知れない苦悩や探検を宿命付けられた人間は、悲劇以外の何ものでもないかも知れない。

同じ町に長い間居続けることは、絶えず増え続ける思い出（過去）に囲まれて生きることだ。トルコの作家オルハン・パムクが『イスタンブール 思い出とこの町』で書いているのはそのことである。「歩き回って町の風景を見ることはこれだけではなくて、その中にいるときの精神状態を町があなたに与える風景と一つにできることもある。（略）ある町をこのように眺めることを習ったならば——一番本物の、一番深い感情と風景とを十分に結び付ける機械を見つけられるほど長く同じ町で暮らしたならば——、しばらくすると（略）特定の町の通りやイメージや風景が、わたしたちにそれぞれ何かの感情や精神状態を思いださせるものとなる」（435-7）。このように、時の流れとともに一旦は意識の世界からすべり落ちた記憶が、変わらぬ町の風景によって刺激を受けて甦生しようとするとき、それはかつてと全く同じ姿をしているだろうか。そうではないことを、私は

これまでの経験から知っている。甦ろうとする過去は、一度でも私のものだったとは思えぬほど捉えがたく、一方で、かつて無かったほど私の心を揺さぶり、この現在を脅かす。しかしそれは、かつての出来事や感情そのものの変化によるはずがなく、そうであるならば、今の私とそれらの間に発生した距離以外に何が変わったというのか。私は今、それを思い出として、今いるところから遠く離れたものとして、見ている。このようなときに痛感すべきは、その思い出の無気味なまでの美しさでも、それに比して色あせた現在でもなく、今のこの世界を支配する秩序の限定性や不完全性ではないだろうか。

場所ではなく時——より正確に言うならば、私たちがまだほとんどその実体を掴みきれていないもの、例えば時のようなもの——の境界を超えようとするからこそ、真の探検だろう。かつて徹底的に「去勢」された人間の真の欲望の対象は、単にこの世界のどこか別の場所ではなく、時のような計り知れない何かを超えた先に広がる世界にしか存在し得ないはずだ。

あらゆる断片に思い出の刻み込まれた一定の場所に居続けることは、即ち、時の流れによる疎外を日々否応無しに噛み締めながら生きることである。そのような中で、私たちは、人間存在にとつて根本的な欲求と同質の欲求のもと、「自分を出発させる」。人間に付き纏う悲劇の解消への道は、

結局、この一本に尽きるのではないかと私は思う。

私が熊本県立大学について語れることは何もない。再びオルハン・パムクから引用するならば、「ある町の一般的性格、精神、あるいは真髓について語る言葉は、むしろ自分たちの精神状態について、間接的に語ることになる。町にはわたしたち自身以外には中心はないのである」(410)。学生として六年、そして現在は職員として、県立大学に通う日々も七年目を迎えた今、生まれ育ち、現在も住み続けている町と同様にこの大学もまた、私自身の様々な過去が刻み込まれた「私の場所」になりつつあるように感じている。これからも、同じ場所で、フォークナーという最高の先達が遺したものを私なりに地道に研究しながら、私は私の探検を続けていきたいと思う。

《出典》

パムク、オルハン『イスタンブール 思い出とこの町』和

久井路子訳（藤原書店、二〇〇七年）

ルメール、A.『ジャック・ラカン入門』長岡興樹訳（誠信

書房、一九八三年）

レヴィイストロース、クロード『悲しき熱帯』川田順造訳

（中央公論新社、二〇〇一年）

想像力と金の粒

田口 由佳（日文五十三回）

私は月出のキャンパスに大学生時代の四年間と、嘱託時代の二年間の計六年間の関わりをもっている。六年間というと小学校と同じ期間なのだが、私の場合、小学校四年生の時に熊本から沖繩に転校したため同じ学校に六年間通ったのは大学が初めて、というちよつと特異な経歴をもつことになる。

小学校六年間の記憶というのはすでに断片的であやふやな遠い記憶になっているのに対し、大学六年間は近年の出来事であり、少なくとも小学校の記憶よりは鮮明でいて、友達も、恩師も、知人と呼べる人も、大学時代に関わった人たちのほうがずっと多い。振り返ってみるとそんな大学時代の六年間のうち、より刺激的だったのは嘱託時代の二年間だった。その理由として、先生方に対して学生としてではなく、同僚として、つまり同じ職員として接するようになったという立場の変化によるところがとても大きい。

学生の時は集団の中の一人ということは無意識のうちには盾として、自分で思うところの平均値に落ち着こうとする意識が強かったように思う。そんなおとなしい学生だった

私は、自ら進んで先生と話をしようという気の利いた積極性に欠けていた。だからこそ先生方に対して生徒としてではなく、同僚として過ごすことになる卒業後の「大学生活」を前にしての緊張感とは半端なものではなかった。しかしその緊張感はいともあっさりとは、憑きものが落ちるように自分から抜け落ちていったのだった。というのも、先生は同じ職員であつてもやっぱり先生であり、優しく接して下さったのである。おとなしかった学生時代の自分からしてみれば、先生と学内メールで仕事の連絡事項をやりとりするのも、顔を合わせて挨拶を交わすのも、学生時代に演習発表を前に資料室で黙々と辞書をめくりながら本棚越しに何気なくきいていた先生と「資料室のお姉さん」の会話を私自身がすることになったのも大きな大きな変化であつた。加えて同じ学部の英語英米文学科・総合文化の先生方、非常勤・集中講義の先生方、図書館の司書の方々、管理棟にいる職員の方々と同じ大学キャンパス内にいながら学生の時に接することのなかった方々との関わりが新鮮に感じられ、それが楽しかったし、何よりとても嬉しかった。

そして刺激的だったといえる嘱託時代のもう一つの大きな要因は同僚の存在であつた。凶らずも一年間一緒に働いた一つ上と一つ下の同僚も、二年間働いた同い年の同僚もみんな英語英米文学科の学生で、これまた同じ文学部の同年代でありながら学生時代、見事に関わりがなかったのだ

た。育ってきた環境、読んできた本やお気に入りの映画、仲のいい気の置けない友達、とっておきのリラックス法や夢中になれる趣味、それらが全く異なる偶然に縁のあった同僚と一緒に過ごす時間が増すにつれ、今までの私の想像を軽く超える世界観がそこにはあることが二年間一緒に過ごすことではつきりとわかってきた。それは自分のキャンパスに未知で鮮やかな色彩が加わるような感覚に近かった。

そういう感覚を味わうと同時に、学生の頃の視界が狭く限定されたものであることを認識し、それが至極勿体ないことのように感じられた。実は物足りないと感じていた日常の中には自分の想像力が足りないだけで見逃している“金の粒”がそこらへんにごろごろ転がっているのではないかと、なんとなく考えるようになった。大げさかもしれないが、大したことのある人生とそうでない人生の差はそういう想像力の差から生まれるものなのかもしれない。そう考えるとまだまだ自分に想像力が欠如していることに気づかされ、軽く落ち込んだりもするのだが、そこに気づけただけでも自分にとつてとても価値のある二年間だったと思う。

そんな二年間を拠点として過ごした日文資料室はすっかり居心地のよい空間にできあがったので、職場を去るにあたって二ヶ月におよぶ地味で地道な大掃除を決行したのだ。資料室に残る色褪せた歴代の本や名前が刻まれたレジュ

メに触れて感じたのは、至る所に見え隠れする、時代ごとに関わった膨大な学生、先生の面影であった。日文資料室の歴史が大学の変遷とともにあることを実感し、その昔から続く脈々と受け継がれてきた流れの一部を自分が担えたことに誇りを感じた。そして大学生活を送る学生がどんなに変遷を繰り返しても、それぞれ自分の思う「大学」の姿と重ね、今の大学が揺るぎなく在ってほしいと願うのではないかと漠然と思った。実際私が原点に返れる、懐かしいと思える場所がそばに在ることがとても有り難く、素直に嬉しいと感じる。学生としても、社会人としても育んでくれた母校と母校に関わる人たちをこれからも温かく見守り、心からのエールを送り続けたい。

(平成十九年日文資料室嘱託退職)